

地域に暮らす障がい児（者）への発達支援

— ミニ運動会の企画運営を通しての学生の学び —

村上 優衣・鹿内あずさ・笠見 康大

抄録：本学では疾患や障がいを抱える地域在住の児童・生徒（在宅療養児）の社会参加の機会と学生の学びの場の提供を目的とした多学科連携プロジェクト（スマイル・プロジェクト）を行っている。今回、プロジェクトの一環として、学生主体でスポーツイベントを企画・運営し、地域の事業所と連携して在宅療養児に参加してもらった。イベント後に学生にアンケートを実施し、事前準備や当日の運営を通しての気づきや学びに関する調査を行った。参加した学生たちは在宅療養児とのコミュニケーションを通して、専門分野の基礎学習の重要性を再認識したり、他学科との連携の重要性に気づいたなどの回答が得られた。また、プロジェクトでの経験が学生のキャリア選択に影響を与えた例も認められた。

キーワード：在宅療養児，発達支援，学生の学び

1. はじめに

本学では、2017年より大学の位置する恵庭市を中心に、疾患や障がいをもちながら在宅で療養・生活している児童・生徒（以下、在宅療養児）とのかかわりを通し、その「もてる力」を育み、高めることを目的とする医療系・教育系5学科（健康栄養学科，作業療法学科，理学療法学科，看護学科，こども発達学科）連携でのスマイル・プロジェクトを実践している（鹿内2018，鹿内他2019，鹿内他2020，村上他2019，山北他2019）。本プロジェクトは、ミニ運動会やクリスマス会といった季節のイベントの開催（事前準備・運営）、チャリティーウォークや地域食堂，お楽しみ会などの地域のイベントへの参加などを通して、在宅療養児とその家族の活動や社会参加をサポートする。本プロジェクトの特徴は、教員による多面的なサポートに加え、多学科連携による専門性の共有とイベントの事前準備や運営を学生主体に行う点にある。実際に在宅療養児と関わることで、リスク管理や在宅療養児の長所を伸ばす関わりなどの大学での座学中心の講義では得がたい経験をすることができる。学生が知的好奇心を育み、主体的に学び考える力を高め、他学科の学生との学際的交流を通して、専門分野の基礎学習の重要性や、専門職を目指す意欲を高めるきっかけになると考えられる。

医療専門職や教育職を志す学生は就職後に発達障がいを抱える児童・生徒に関わる可能性があり、これらの経験は非常に有益である。さらに医療系・教育系学生は、在学中に数週間から数か月の実習を経験するため、実習を迎える前に在宅療養児と直接関わる機会を得られるのは、これまで習ってきた基礎知識の確認と実践、実習へのモチベーションを高める意味からも貴重な経験であると考えられる。

2. 目的

本報告の目的は、スマイル・プロジェクトの活動として2019年9月に2回実施したミニ運動会に主体的に参加した学生の学びを分析することにより、学生たちの変化を捉え、今後のプロジェクトの

活動や学生教育への示唆を得ることである。さらに、本プロジェクトに参加した学生のうち、今回のイベントに2回とも参加した学生の変化を捉えることで、複数回に渡り参加することで得られた気づきや学びを考察する。

3. 方法

3.1 対象者

対象は、スマイル・プロジェクトの一環として、2019年9月に実施した2回のミニ運動会に主体的に参加した学生で、人間科学部健康栄養学科・作業療法学科・看護学科・こども発達学科の学生計17名である。

3.2 企画の内容と手続き

ミニ運動会は2019年9月に本学体育館にて2回に渡り実施された（各回で参加した在宅療養児は異なるため、それぞれの児の身体機能や参加人数を考慮し、プログラムを変更した）。恵庭市子ども発達支援センターの小学生対象の児童デイサービスとの共同企画として、2019年9月10日に実施したミニ運動会に参加した在宅療養児は、恵庭市子ども発達支援センターに通う小学生15名で、事業所のスタッフは3名程度参加した。本学教員は3名参加し、学生の実施をサポートした。このミニ運動会の実施に向け、8月23日に作業療法学科学生2名とこども発達学科学生2名、支援センターの職員2名、本学教員2名で打ち合わせを実施し、当日の流れやプログラムについて意見交換を行った。この期間中、学生スタッフはプログラムの実施に必要な物品や小道具の準備や製作に携わった。当日の活動内容は、①開会式、②ものつなぎ、③ミニミニ運動会（障害物競走、ダンス、宝探し、穴に入れられるかな?）、休憩をはさみ、④借り人競走、⑤閉会式であり、およそ90分間の活動であった（図）。ミニ運動会の実施後、9月26日にこども発達学科4年生1名、作業療法学科4年生4名と支援センターの職員2名、本学教員2名で活動の振り返り会を実施し、意見交換を行った。

一方、恵庭市内にある6か所の発達支援事業所との共同企画として、2019年9月21日に実施したミニ運動会に参加した在宅療養児は、恵庭市内にある発達支援事業所に通う小学生・中学生・高校生計42名で、事業所のスタッフは29名参加した。本学教員は3名参加し、学生の実施をサポートした。事業所との事前打ち合わせは、事業所スタッフと教員で実施し、事業所からお借りする玉入れの物品の搬入日程や場所の打ち合わせを行い、当日の流れやプログラムについて意見交換を行った。当日の活動内容は、①開会式（参加者紹介を含む）、②玉入れ、③ミニミニ運動会（障害物競走、ダンス、宝探し、穴に入れられるかな?）、休憩をはさみ、④借り人競走、⑤閉会式であり、およそ120分間の活動であった。

プログラム

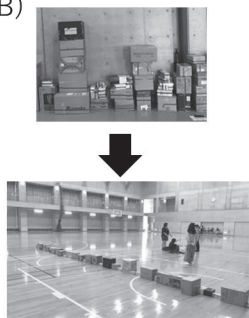
1. 開会式：挨拶と今日の流れの説明 (A)
2. ものつなぎ：段ボールや空き箱を長く繋げよう (B)
3. ミニミニ運動会：4つの種目を回れるように設定 (C)
宝探し / 障害物競走 (D) / 穴に入れられるかな? (E) / ダンス
—休憩—
4. 借り人競争：写真カードの人物を探そう (F)
5. 閉会式：おみやげを渡し、終わりの挨拶



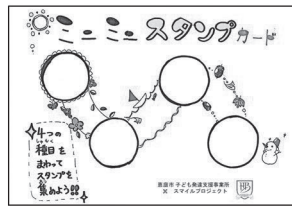
(A)



(B)



(C)



(F)



図. ミニ運動会のプログラムと実際の様子

(A) 開会式の様子. 学生による在宅療養児・事業所の職員へのイベントの説明. (B) 「ものつなぎ」で使用する段ボールや空き箱と実際の様子. (C) ミニミニ運動会で使用したスタンプカード. 各競技に参加してスタンプを集める. (D) 障害物競走の様子. (E) 穴に入れられるかな?の様子. (F) 借り人競争でゴールしたら胸につけてもらえるお花. スタンプカードや小道具はいずれも学生の手作り.

3.3 アンケート調査

参加した学生の学びについて検証することを目的として、2回のミニ運動会実施後に参加した学生に対してアンケートを実施した. 自記式質問紙により、プログラムについての振り返りを行った. 質問項目は、(1) 所属・年次、(2) 自身が関わった活動内容、(3) 主に自身が関わった在宅療養児の障害の状態について、(4) かかわりの中での工夫・意識した点、(5) 困難であった点、(6) かかわった在宅療養児の今後についてどのようになってもらいたいと感じたか、(7) かかわった在宅療養児の強み・長所、(8) かかわりの前後での自身の変化、(9) 参加しての思いや全般的感想の9項目であった. これらの記載内容を質的に分析した.

3.4 倫理的配慮

本研究は、北海道文教大学倫理審査委員会の承認を受け(承認番号:30024)実施した. 研究協力学生スタッフ、および、対象となる在宅療養児、保護者に対して、文書および口頭で説明し、同意を得た場合に同意書にサインをし、両者が保管した. いつでも辞退可能であり、その際の不利益は無いことを保証した. 学生への説明時、活動前にはボランティア活動保険に加入し、研究で得た学生の学び等のデータは学会等で公表すること、結果を学生にフィードバックすることを伝えた承を得た.

4. 結果

4.1 参加学生

2019年9月10日に実施した恵庭市子ども発達支援センターの小学生対象の児童デイサービスとの共同企画として実施したミニ運動会には、作業療法学科4名、看護学科1名、こども発達学科3名の学生8名が企画と運営にかかわった。また、同年9月21日に実施した恵庭市内にある発達支援事業所との共同企画のミニ運動会には、作業療法学科3名、看護学科3名、こども発達学科4名、健康栄養学科2名の学生12名が企画と運営に関わった。上記2回のミニ運動会に両方参加した学生は3名であった。

4.2 全体の様子

全学生が準備段階から主体的に参加していた。ミニ運動会当日は、初めのうちは緊張して、たどたどしい様子が見受けられたが、徐々に在宅療養児に対するかかわり方に慣れていき、的確に対応できるようになっていた。また、2回目の運動会では初回の経験を活かして、より臨機応変な運営が可能となっていた。恵庭市子ども発達支援センターとの共同企画のミニ運動会の実施後に、実施した活動の振り返り会において、センター職員からは「初めて会う児とのコミュニケーションがとれていて、よかったと思う」「学生が企画していて、自分たちのために頑張ってくれているということが(センターの)子どもたちに伝わっていた」「児の特性に環境が影響することがわかった。体育館の広さや知らない場所であることにわくわくしたり、興奮する児もいたので、一度館内を巡ってみるのもよいと思う」などの意見を頂いた。

4.3 アンケート結果

(3) 主に自身がかかわった在宅療養児の障害の状態については、「多動のような子どもが多く、学生からの指示や声掛けが伝わりにくかった」、「動き回っている子どもが多く、注意が向かないこともあり、危険なことをしないか気をつける必要があった」などの回答が得られた。また、(8) かかわりの前後での自身の变化では、「一部の子どもにかかわるだけで精いっぱいであったが、徐々に少しだけ全体の流れを見ることができるようになった」「初めはうまくかかわれなかったが、活動を経て子どもと同じ目線でコミュニケーションがとれるようになった」などの回答が得られた。(9) 参加しての思いや全般的感想では、「準備の段階から他学科の学生と活動する中で、学科によって子どもに対する考え方や捉え方が少しずつ違っていて、違う角度で子どもを見ることができ勉強になった」「子どもが活動をとても楽しんでくれて、笑顔をたくさん見られ、改めて子どもにかかわる仕事をしたいと思った」「障がいをもった子どもたち全体をまとめることの大変さや自分たちの想定ではなかったようなことも起きるため、どのようにリスク管理を行えばよいか考えさせられた」「スタッフの方と子どもたちのかかわりを見て、言葉掛けの仕方や動き方を学ぶことができた」などの回答が得られた。

2回のミニ運動会に参加した学生からは、(3) 主に自身がかかわった在宅療養児の障害の状態については、「病気や障害の特徴が現れるときもあったが、うまく誘導できれば問題ないと思います」や「社会生活を送るうえで、活動を切り替えることに時間がかかるなど、困難な場面があると思う。OTとして児と関わりたいという気持ちが増えた」などの回答が得られた。(8) かかわりの前後での自身の变化では、「児の様子をうかがうだけではなく、自ら働きかけることの大切さを学んだ」「初めは子どもに話しかけることに緊張していたが、話しかけると反応を返してくれるので、積極的にかかわること

ができた」などの回答が得られた。また、(9) 参加しての思いや全般的感想では、「最上級生として、どのようにすれば皆が動きやすいか、どのくらいの役割を担ってもらえばよいかなども考えながら実施するのは大変だった。準備をしっかりとすればやれることが増えると感じた」などの回答が得られた。

5. 考察

アンケート結果から、在宅療養児および複数学科の学生との交流を通して、在宅療養児の身体的側面を理解するためには、身体機能や疾患、障がい、治療についての知識が必要で、講義や演習でさらに深く学ばなければならないということなど、専門分野の基礎学習の重要性に気づき、学ぶ意欲が高まったことが示唆された。在宅療養児の障がい像の捉え方では、未熟ながらもかかわりから、その子どもの特性を捉えようとしており、在宅療養児の個別性を理解する必要があることへの気づきが深まっていた。Walter が提唱する、『すべての人が例外なく共に決定し、共に形成する』というインクルージョンの考え方に触れ、他学科の学生やセンターや事業所のスタッフの対応から、「作業療法学科の学生の機能を伸ばそうとする視点がすごい」、「こども発達学科の学生の子どもに対する声かけやタイミングが上手だ」、等の気づきにつながり、自身と異なる専門性を有する学生同士で協力し合うことの重要性を感じられていたことが示唆された。

また、本プロジェクトに参加したことで発達領域への関心がさらに高まり、自身の希望通り発達領域の医療専門職に就いた学生もおり、本プロジェクトでの活動がキャリア選択の一助となったことが示唆された。

文献

鹿内あずさ：在宅における児の発達支援～、こどもと家族のケア、日総研出版、12 (6)、pp.14-18、2018.

鹿内あずさ・村上優衣・小塚美由記・白幡亜希・笠見康大・服部裕子・福士晴佳・佐藤明紀：障がいを持つ在宅療養児への発達支援～スマイル・プロジェクト～、日本子ども学会、p.38、2019.

鹿内あずさ・村上優衣・服部裕子：医療的ケア児と保護者の暮らし～新型コロナウイルスが拡がる中での不安や戸惑い～、こどもと家族のケア、日総研出版、15 (3)、pp.91-95、2020.

鹿内あずさ・村上優衣・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子：障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト～A 大学5学科の学生と教員の活動を通して～、日本感性工学会 感性フォーラム in 札幌、2020.

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・白幡亜希・小塚美由記・福士晴佳・服部裕子・佐藤明紀：障がいを持つ在宅療養児への発達支援～作業療法学生の学び～、日本子ども学会、p.38、2019.

村上優衣・鹿内あずさ・笠見康大・小塚美由記・白幡亜希・佐藤明紀・服部裕子：障がいを持つ在宅療養児への発達支援プロジェクト～ミニ運動会における学生の学び～、日本感性工学会 感性フォーラム in 札幌、2020.

山北葵・小塚美由記・白幡亜希・鹿内あずさ：障がいを持つ在宅療養児への発達支援～栄養学科学学生の学び、日本感性工学会 北海道支部 第7回学生会、2019.

ローレ・アンデリック 著、春見静子他 訳、2019、『モンテッソーリ インクルージョンへの道 実践のための実践による考察』ロギカ書房、20-21

Developmental Support for Children with Disabilities Living in the Community: Learning from Planning and Management of Sports Events

MURAKAMI Yui, SHIKANAI Azusa and KASAMI Yasuhiro

Abstract: Hokkaido Bunkyo University has run Smile Project which has aimed to provide the opportunities of social participation for children with home care and of learning for students. The purpose of this research was to investigate students' learning from planning and management of sports events for children with home care. As a part of the project, students managed the sports events and invited the children. After the event, students answered questionnaires about learning from the experiences. Some students realized the importance of basic knowledge and corporation beyond departments again.

Keywords: Developmental supports for children with home care, Students' learning